九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

砥部焼産地の革新機構

宮川, 泰夫
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・地域構造講座

https://doi.org/10.15017/8571

出版情報：比較社会文化. 2, pp.37-50, 1996-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化』第2巻（1996）37～50頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.2（1996），pp.37～50

砥部焼産地の革新機構

宮　川　泰　夫*

キーワード：民芸産地，技術伝播，革新機構，中核企業，接遇環境

1　はじめに

陶磁器は人間の生活と密着し古くから用いられてきた．陶磁器産業は日用消費財工業の代表として古くから発達し，生活文化を表徴してきた．それだけではなく，その原料，製土，焼成を通して土・水・火と関わりつつ陶磁器産業はその地域の風土をも体現してきた．窯の火入れでの土・水・火の三神の祭事は風土と文化を結ぶ紐帯でもある．風土文化の革新につれて，陶磁器産業は陶磁器それ自体のもつ美をその銘柄性の向上と価格帯の上昇のためにも産業の革新機構の一つとして追求してきた．

陶磁器のもつ機能と美観の追求は，工人としてだけでなく産業としてもその技術の交流を不可避とさせてきた．陶磁器技術の革新は原料・製土・成形・焼成・釉薬の全般に亘って進展してきている．なかでも陶器から磁器への発展はまさに革新的で，我国の陶磁器産業に大きな影響を与えただけでなく産地の存続にも深く関っており，陶磁器産地の体系的発展，革新の一つの推進力をなしてきた．

我が国の陶磁器産地は縄文・弥生式土器の生産とは次元を異とし，朝鮮や中国の技術を導入した須恵器の生産を基とするものが少なくない．陶の地名も末・須江・須恵と同じく須恵器産地に由来するものが多い．ロクロの使用と職人集団の存在がこの須恵器産地の特色である．これは，職能分化と市場形成を表徴しているが，外来技術の重要性をも示している．

この外来技術のなかでも釉薬の技術は特に重要であり仏教文化の導入，寺院の建設と深く関り中国からの輸入の増大につれて我が国でも釉薬の生産が試みられた．六古窯の一つ瀬戸（赤津焼）を生み出した猿投はその一つである．瀬戸の黄瀬戸は鎌倉時代を代表する釉薬であり，瀬戸は，既に中国との技術交流を有していたとされている．陶磁器の輸入基地の九州北部とこの瀬戸は今日に至るまで我が国の陶磁器産地の体系的分析を行う上で重要な地域であり研究も多い．

この二つの地域の間に位置した京都の都は単に需要の中心であるだけでなく，宮中や寺院に加え室町時代には新たな武家文化の中心となった．特に茶道や香道・華道の発達は陶磁器の美観の向上に深くかかわり，陶磁器産地の工芸産地化を促進することともなった．

上述した需要構造と輸入陶磁器の増大は，瀬戸における志野や織部など新たな釉薬の開発を産んだ．瀬戸を含む尾張を治めた織田信長や尾張生まれの豊臣秀吉は陶磁器の工芸化を促した．特に豊臣秀吉による文禄，慶長年間における朝鮮出兵は陶器から磁器への移行だけでなく，捕虜とした朝鮮陶工による新たな産地の発生を九州を中心とした西南日本にもたらした．

なかでも李参平が泉山石を発見したことで1616年に染付磁器を産み出したとされる有田はこの代表的産地である．この技術は，登窯やけりロクロとともに今日でも六古窯の一つ立杭等で生き続けている．また金海は，瀬戸で茶器の技術を学び，薩摩に戻り開窯している．

磁器の発展は，各藩の幕府を始めとした諸侯への献上品生産政策と深く関係した殖産政策によってもたらされその生産は全国化した．最初の御三家，尾張藩の開祖，徳川義直による美濃からの陶工帰還策や免税策はその象徴である．有田の中心性はこうした磁器の技術と豊富で優れた原料によってもたらされた．この有田から技術を導入した瀬戸が有田と並ぶ大産地に成るには，天草や肥前の技術に加え原料土の配合技術の開発によるところが大である．こうした両産地の発展によって，1658年には日本は磁器の輸出国に転じている．

大州藩の砥部郷で砥部焼が生産されたのもこの頃で，

＊日本社会文化専攻・地域構造講座

1740年の大州秘録には陶器茶碗や鉢類が大南村と北川毛村の特産として記録されている．この陶器産地も1777年には磁器産地へと藩の殖産政策で転換している．砥部焼は天草砥石を原料とした肥前の磁器にならって外山産砥石屑を原料として始められている．明治維新以降に，輸出産地として発展した砥部焼産地は今日では内需を基礎とした民芸産地へと転換して残存し，その構造を革新してきている．

本論では，この一地方産地の砥部焼産地をとりあげ，技術伝播，中間組織，民芸運動等従来の研究では必ずしも充分論究されてこなかったその相互関係に留意して地場産業の国際化と関連づけながらこの産地が時代の変化に適応して革新してきた機構を明らかにしてゆきたい．

2 技術の伝播と産地の革新

砥部焼の起源については砥部町教育委員会による砥部焼の歴史（1969）において詳しく論じられている．重信川を渡った旧原町麻生字土壇原では，弥生式土器や須恵器が丘陵地で出土しており，その南の通谷池の谷筋の宮内古鎌では須恵器の窯跡が発見され，須恵器生産の中心地をなしていた．須恵器の生産はさらに奥地の北川毛でも行われていた．

北川毛では，前述した大州秘録に記された陶器窯跡が発見されている．この北川毛の出土品と肥前の黒牟田の丸田窯の出土品から推察されるように，『砥部焼の歴史』(43－45頁）によると，砥部の陶器はこの黒牟田の技術によるところが大きいとされている．これに加え，黒牟田と同じ日用雑器生産地で1712年には藩命で磁器を焼いていた大村藩の波佐見，天草砥石を磁器原料として用いていた平戸藩の三川内の技術が砥部の陶器に影響を与えたものと推量される．

こうした土器・須恵器・陶器生産の歴史的重合性と鍋島藩の有田と隣接した三産地との技術的類似性は，砥部焼産地の磁器産地としての革新を技術伝播の視点から考察していくうえでも重要である．特に技術伝播の経路の存在と砥部における技術中心性の欠如は，技術導入を重視した藩の殖産政策と関連づけて陶器産地を基とした磁器産地化を分析してゆくうえで充分留意しておかなければならない．

大州秘録では北川毛とともに大南村の土産にトベ焼（ヤキ）が記述されており，今日の砥部焼産地の核心地形成の萌芽が見えていた．砥部はもともと文禄・慶長の役で水軍を率いた松山藩の加藤義明の支配下にあった．そして，大州藩の風早郡78ケ村と松山藩の伊予，浮穴郡の20ケ村との替地が行われたのは万古焼発生地の桑名から久松定行が松山城主として赴任する直前の1635年である．また，1617年に設立された大州藩は，北川毛に先立ち1698年には大洲藩の御庭焼として肥後出身の御替地大目付役戸田権兵衛が八代の陶工とはじめた梁瀬焼を開窯している．この『陶説』（1958）での梁瀬焼と享保年間の砥部焼の連続性を推量した大田政太郎の指摘も見逃せない．その成形上の類似性の議論の当否は別として，こうした藩領と藩主，その支配機構を考えると少なくとも砥部では磁器生産に先立って朝鮮の陶磁器技術に大きく影響された九州の先進的技術の伝播を許容し受け入れうる状況があり，しかも山間の谷間にあって藩の殖産政策に基づく独自の陶磁器産業育成の適地を成していたと言えよう．

砥部が陶磁器生産において一つの銘柄性を得たのは，その磁器原料にあった．産地の南西に位置した外山は，伊予砥の産地でその砥石屑の処理に明和の賦役廃止（1766年）にみられるように窮していた．この砥石屑を肥前の磁器原料の天草砥石の如く原料として用いることを取引先で，後述する長与窯の陶工を自ら雇用して高浜焼を生産していた天草の庄屋の上田からの情報で知っていたのが大阪淡路町の砥石問屋和泉屋治兵衛である．和泉屋はこのことを大洲藩に進言している．

陶磁器生産の発生に関しては，こうした御用商人を介した藩相互の関係も渡り職人を通じた産地相互の関連や藩の殖産政策と同様に見過ごしてはならない．

1775年に大洲藩でこの殖産政策を立案した加藤三部兵衛は在町（1682年）に成長していた原町の杉野丈助を監督とし，原町と重信川の間に位置した麻生の御用油商の門田金治を起業の責任者とした．窯は，外山に近い五本松上原に築かれ，陶工としては和泉屋の斡旋により休止中の長与窯の五人の職人が呼び集められていた．長与窯自体は，1667年に波佐見の尾古太郎兵衛が大村藩命で開窯したもので，上述した産地間関連の内にある．しかし，砥石屑と釉薬の不適合で焼成は失敗し，陶工は砥部から戻った．九州からの渡り職人の再来とその産地適合性は，1777年の焼成の成功が筑前上須恵窯の陶工信吉による蚊母樹灰使用の進言ではじめて可能になったように砥部のような地方の新興産地の形成にとっては重要である．

大洲藩の藩窯から民窯への転換は，この1777年と早い．民窯の成功は，近接した三秋村での杉野による釉薬の原石の発見，門田による肥前や筑前からの陶工の招致，そして燃料源として雑木に比べ灰分が少なく黒松に比べ釉薬に調和しやすい赤松の生い茂る松山の贈与，藩の調度品や贈答品としての調達，庄屋格の扱い等の藩の保護政策による．

民窯としての成功の結果，1784年には，藩主加藤泰候（1760－87）が門田窯を来訪するまでになっている．この1784年に門田の上原窯に勤めた喜代八は，1800年には独立して大州藩の支藩として1623年に開かれた新谷藩の大南村の大宮八幡宮のお旅所に開窯している．喜代八の孫の城戸源六は，1851年には素焼窯を本焼窯の上に築く等築窯技術の革新を行っている．この城戸家の墓地には，後に山本屋

と号した中村五三の墓もあり，技術伝播の近隣性の分析の上では興味深い．この五三とともに門田の上原窯を借り受けた重太夫は，平戸屋と号して北川毛の墓石からすると1832年に83才で歿しており，長期わたって技術的影響を産地に与え続けた．

こうした外来の技術を革新して地域技術化してゆく上で大きな役割を果たしたのが，1815年により外山に近い五本松村花畑に開窯した向井源治である．源治は1818年に川登石を発見して磁質を改良して砥部白磁を開発している．こうした原料の改良技術の一つとしての陶石粉砕の水車利用技術も肥前から導入されている．

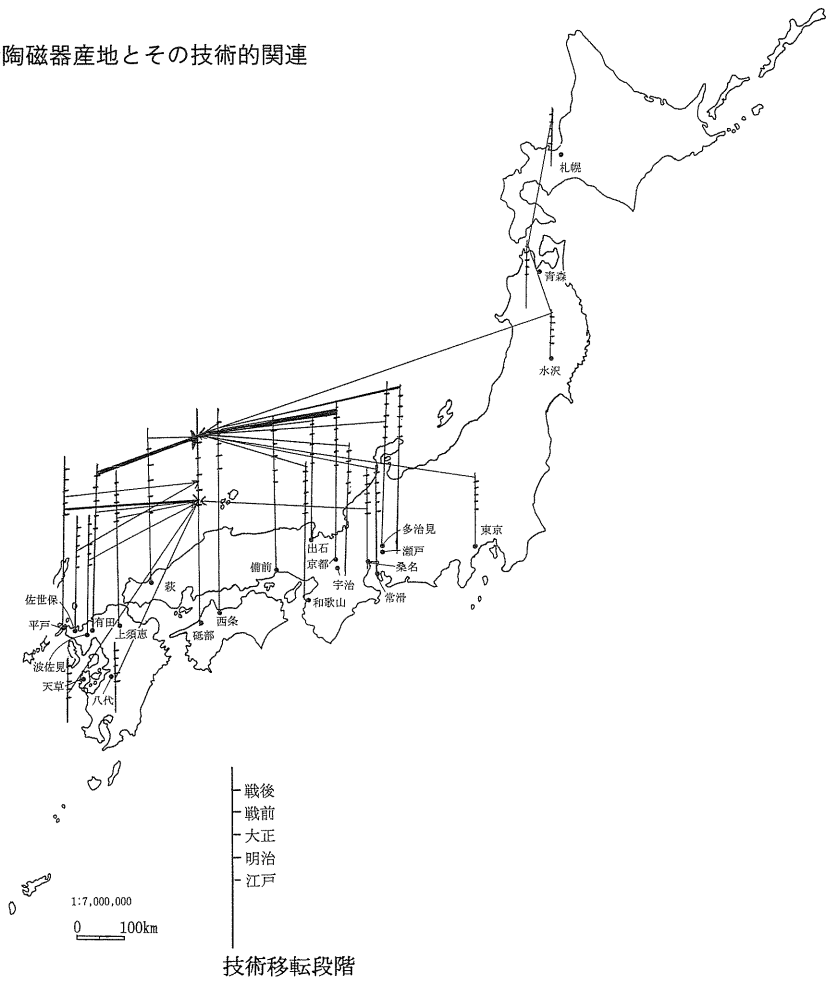
肥前からの技術導入で特筆すべきは，1825年の藩命による亀屋庫蔵によって伝習された錦絵である．これは，錦絵磁器の生産による商品の多様化だけでなく，絵具や呉須の買い付けを通した長崎との交流や筑前，肥前との交流を励起した．こうした交流が，1828年の有田皿山の大火による陶工の渡り職人化と関連して，鍋島藩窯の大川内窯の名工の副島（久米）勇吉の砥部逗留の俗伝を瀬戸と同様に生んでいる．

技術の伝播は上述した産地間交流を踏まえた地域技術の開発を加速する時期とその主体の性格とかかわって新たな産地存続とその革新の機構をうみだした．この革新機構は，1854年には15窯元の展開をうみ，1868年には18窯元に増大させた．明治に入り1880年に錦絵磁器を，1890年に淡黄磁器を生み出した二代目向井和平は，砥部における産地革新とかかわったその典型的人物である．

ドイツ人ワグネルに象徴される明治維新期の近代技術は近代化の主体の存在した地方産地にとってはその存続と革新にとって大きな役割を果たした．1871年の向井による粘泥乾燥窯の設置，1874年の絵具細砕機の発明はこの一例である．これは甥の伊達幸太郎を伝統と近代の両面にわたって陶磁器産業における技術と美術の中心をなした京都で西洋絵具による彩画描金法を習得させることで向井の錦絵磁器製造の布石をなしたと言えよう．向井によるこうした他産地技術の渡り職人等を通じた導入と自らによる地域技術の開発はこの陶工集団の形成を基としていた．

この陶工集団の形成にとって先進地の京都だけでなく，丹波出石から川内町の庄屋宇和川の須之内窯や元代官奥平の松瀬川窯を経て染付絵師平尾儀七や九州三河内の彫刻師椋尾喜三郎，石膏型職人の一ノ瀬幸吉，万年石を1875年に発見した松瀬川窯，須之内窯の白潟秀三郎，白潟が同じ松瀬川窯からこの下向井窯へ呼び寄せた彫刻師の渡部歌次，

第１図　砥部焼陶磁器産地とその技術的関連



久次父子等他産地の陶工が果たした役割も見逃せない．こうした陶工集団の存在が，向井と城戸による1885年の清国への砥部焼の輸出や鵜の崎石を用いた淡黄磁器で1893年のシカゴ世界博覧会における一等賞入選をもたらしている．また，渡り職人を含む陶工集団は島根の広瀬藩士のロクロ師の岩田幸市を丹波出石から1894年に引き寄せるなど地縁，血縁的自己増幅運動をおこしている（第一図）．

絵付けに関しては，輸出の開始された1885年に清国の胡鉄梅が砥部にきていることは注目に値する．また，輸出産地の美濃の美濃式小窯も1895年には宮内東山の藤田万吉によって導入されている．1897年には，平尾甚吾によって瀬戸の加藤五郎兵衛から型打法が伝習されている．美濃，瀬戸の二大輸出産地との関連は，その後も多治見の陶画師酒井八郎の前述した下向井窯での就業や後述する常滑・瀬戸・有田で陶磁器生産教育に従事した寺内信一の1918年の村立砥部工業徒弟学校赴任にみられるように砥部陶磁器産地の存続に大きな影響を与えた．次章で述べるように，学校，組合に加えて1930年に砥部工業学校の卒業生と県立試験場砥部分場の出身者を中心とした砥部陶友会の設立は，産地内での技術伝播に深く関わった．

東西の巨大な輸出産地だけでなく，美観の向上に重要な役割を果たす京都との関連も1943年の輸出途絶後，中核企業の梅野製陶所に疎開した京都の陶芸家手塚豊房に代表されるように砥部産地では保持され，産地の存続，革新の機構を強化しつづけた．

3　中間的組織の機能と民芸産地の確立

産地組合の設立は古く，1888年に陶磁器業組合が下浮穴，伊予両郡の業者によって設立されている．これは1881年に興業意見を編纂した前田正名が固有工業の窮乏を論じたように明治維新と開国に伴う混乱を回避して地場産業の再興を図ることを意図した1884年の同業組合規則（重要物産同業組合法）による物産改良運動を反映したものである．1900年には産業組合法も公布されて組合活動は一層強化された．

上述した向井和平は1890年にこの陶磁器業組合取締役に就任し，産地の革新機構を強化すると伴に全国52会愛媛支部陶磁業部長として産地の対外的紐帯をなした．この組合は組合員20余名にしては，組合事業内容に内外の陶磁器の収集，内外産地の視察，販売拡張策の立案，意匠考案者の特別保護等内外技術の導入と革新を勧めてきた産地の伝統を反映し，活発な活動をおこなってきた．1903年には温泉郡（下浮穴郡）の土器，素焼，楽焼業者を分離して伊予陶磁器同業組合を設立して産業組合的色彩を強めた．

1904年に向井が死亡して以後は1912年から1925年まで組合長を勤めた佐川広太郎が組合活動を主導した．砥部村川登生まれの佐川は1891年に川登村の庄屋で原料産地近くで藩制下では水車業をほぼ独占していた坪内宗実の深田窯の支配人となり，1906年には水車組の世話人になり，1907年にこの深田窯を継承している．佐川は，1912年から1919年までは村長も勤め，1915年には村立砥部工業徒弟学校を設立している．この後も，1932年から1942年まで佐川は砥部町立窯業試験場長を勤め，砥部焼に大きな影響を与えた．

組合としては，1926年に砥部商工組合が設立されて商工関係の円滑化による砥部焼の振興がはかられた．1929年の大恐慌を契機とした翌30年の産業合理局の設立にみられるような産業の合理化の進展，31年の重要産業統制法の公布，32年の農山漁村経済更生計画の樹立，33年の商工業組合法の公布といった地方地場産業の再建計画に従い1934年には伊予陶磁器同業組合を改組して伊予陶磁器工業組合が設立されている．

伊予陶磁器工業組合長として活動を主導したのは，山本秀五郎の三男で梅野家の女婿となった鶴市である．1938年には，商工省の助成による国庫補助金と商工組合中央金庫の融資で1929年に県立工業試験場砥部分場に設けていた杯土生産一貫工場を上回る共同施設として杯土調整工場を建設した．この杯土工場は，翌1939年に戦時工業転換の共同施設として工業用陶磁器代用品製造工場が設けられると，電磁器生産が中心となり杯土供給による陶磁器振興と産地統制は二義的になった．これは，工場が呉海軍工廠軍需施設部の指定工場となるとさらにその意義を弱めた．1944年には，遂に商工組合法の規定で統制組合に移行し，伊予陶磁器工業統制組合となり，企業整備をはじめた．

こうした組合の共同施設は，第二次大戦の終戦に伴い梅野を初代社長とする1947年創業の愛媛陶器に移設された．1943年には，その碍子が逓信省の通信碍子納入試験に合格して指定工場となり，四国電力などへの納入によってその基礎を固め，1955年にこれは愛媛碍子に社名を改めている．

組合の共同施設の移行に伴って1947年の商工協同組合法に基づき伊予陶磁器工業協同組合に改組した組合は梅野理事長の下で国，県の補助金を活用して1948年に五本松に窯道具製造工場を，49年に製土工場を建設した．さらにそれに伴い陶石採取，搬出施設を完備した．また石膏型工場や上絵付工場をも建設した．

1949年に，中小企業協同組合法が公布されると，伊予陶磁器工業協同組合も伊予陶磁器協同組合に改組された．そして組合は倒焔式窯二基を備えて，登り窯から新たな窯への転換を加速し丘陵地から平坦な市街地への立地移動をもたらした．1951年には，釉薬調整工場を建設して製品の品質向上に寄与した．1952年に安別当陶石採石搬出施設を設けて産地の基盤をかためた．こうした組合の活動は1952年

に中小企業庁長官賞をうけることでさらに強化された．佐川と同様に，梅野も戦前戦中戦後の三期にわたって町長を勤め，組合と表裏一体となった影響力を発揮したことも産地の革新を考察してゆくうえで重要である．この組合に加えて企業組合としては1961年に中予陶石企業組合が，1964年には陶磁器問屋の大川久吉を中心に砥部製陶企業組合が設立されている．

1965年には，組合長が梅野鶴市から1954年以来愛媛碍子の社長を梅野から引き継いでいた沢田勝身に代わり，1975年まで勤めた．そして，1975年からは再び鶴市の息子武之助が，組合長となり1976年には伝統的工芸品産業の振興に関する法律（1974年公布）に基づき砥部焼の伝統的工芸品指定を勝ち取っている．この指定を契機として，組合は町や県，国とともに後述する砥部焼伝統産業会館，陶祖が丘，陶板の道，砥部町陶芸創作館の建設を進め，アートの里としての接遇環境整備に町当局とともに努めてきた．梅野自らも陶芸の里の奥，大南の大谷に位置する梅山窯（梅野精陶所）を活用して，登り窯の保存や古陶資料館を建設し，後述する民芸運動の拠点性の強化をおこなっている．

砥部焼産地は，徒弟，職人の教育に関しては昔から熱心で，門田，向井，梅野といった中核企業による陶工の自己培養だけではなく，体系的教育に取り組んでいた．明治維新政府は，1870年には大学規則，小中学校規則を頒布し，71年に文部省を設置し，72年に学制頒布をおこなっている．五本松村の庄屋伊藤五本松斎が寺子屋的教師となったのもこうした時代的背景の下である．そして，1877年に戸長旧里正として産地革新のため自ら窯を開き，翌1878年に管田徳蔵をして肥前大河内から富永弥兵衛・大田善太郎を招聘させ，技術革新に努めている．1886年には，政府は小学校令・中学校令を公布し，1900年には小学校を義務教育化した．

この一方，産業の発展に合わせて明治政府は実業教育にも力を注ぎ，1899年には実業学校令を，1903年には専門学校令を公布している．こうした歴史的風潮の中，砥部村でも有志が1906年には砥部陶器補習学校を開設した．この年には，砥部焼産地は神戸の貿易商池田貫兵衛と取引を開始しており，この補習学校の開設は量産輸出産地としての発展にとっても重要な布石となったと言えよう．

後述するように，1914年の第一次世界大戦の好況の中，宮内村の橋田精一は，父金四郎から受け継いだ砥部大南の産地問屋を輸出商社として発展させて橋田商事を設立している．前述した村長兼組合長の佐川による村立砥部工業徒弟学校の創設は，この翌年の1915年である．この1915年には青年訓練所も設置されて徒弟教育の社会的環境と必要性が一般的にも認識された．佐川は，村費に加えて工業徒弟学校規定を活用して陶磁器同業組合，国，県，郡の補助金で砥部小学校長赤星弥一郎の協力をえて，砥部工業徒弟学校普通科を小学校において赤星を兼任の校長として開校した．

砥部工業徒弟学校の実習は福岡庄太郎窯にロクロ科，陶画科を置いておこなっている．福岡窯は伊予市三島町から砥部に移り住んだ三島嘉兵衛が陶祖丈助の碑近くにあった大塔窯を受け継ぎ，1872年からは前述した城戸源六が営んできたものである．こうした窯の継承は，三者の姻戚関係を基におこなわれている．福岡家は岩谷口村で庄屋日野家に次ぐ資産家と『砥部焼きの歴史』に記述されており，この窯の経営を踏まえて，大南字客の大登窯を営み，産地での資産を有した名望家としてその細工場を実習場として提供していた．窯業主任の佐久間石太郎の下でロクロを教えたのは前述した平尾儀七の息子甚五で，陶画を指導したのは前述した岐阜県の土岐郡立陶器学校卒業の酒井八四郎である．

砥部工業徒弟学校は1916年に石炭窯設置を試みる等斬新的努力をもおこなった．これは，松割木の価格が明治中期に比べても4倍になったことや他の大規模先進産地で石炭窯が普及してきたことにもよるが，郡中港からの石炭搬送の運賃の高さや釉薬になじみやすい赤松がまだ近隣に豊富に残存していたため砥部では用いられなかった．

1918年に砥部工業徒弟学校に赴任した寺内信一は，1877年に工部省美術学校でラグーザに彫塑を学び，常滑と瀬戸で教育と輸出見本制作にあたり，瀬戸陶器学校の教師となり，さらに有田工業学校校長，中華民国湖南高等工業学校教授を歴任し，1870年に帰国して，タイル等帝国ホテルの建築用陶材を瀬戸で製造していた．そして，1905年には砥部で前述した向井，城戸とも会っていたとされている．この寺内は，1925年には，砥部工業学校校長として，名実ともに瀬戸，有田の二大産地での経験を生かして砥部の職人教育，品質，デザインの改善に多大な影響をあたえている．この教育の成果は，今日でも外山の鳥山窯の大東増夫などによって受け継がれている．

すなわち1922年には，砥部村長阿部唯一が中心となって，北山崎村，郡中町，松前町とその有志の寄付と職員，生徒の労役で砥部工業徒弟学校を五本松花畑に新築移転し，村立砥部工業学校として開校した．そして，下向井窯の閉鎖にともなって再び酒井や同じ下向井窯の大物造りで名声を得た松田喜一郎，前述した幸市の息子岩田永三を教師に迎える等教育体制を強化した．1924年に寺内が校長になるに先立って学則改正で3年制としたが，その辞任一年後の1929年には閉校されている．

これを受け継いだ県立工業試験場砥部分場も研修生制度を保持した．1932年にその廃止にともない，再び佐川広太郎を試験場長として町立窯業試験場に分場を改組した．その後も研修生制度は，第二次世界大戦後の1947年に上山製陶園（1950年，愛媛碍子と合併）に払い下げるまで戦時の

途絶は多少あったものの堅持された．この研修制度は，1935年に山田善吉に丸型倒焔式窯を個人としてはじめて試みさせる等その影響力を発揮した．

戦後は，1952年に伊予窯業公共職業補導所の閉鎖を受けて，愛媛県立工業試験場砥部分場が設立された．これは，瀬戸や多治見に派遣した技術員の情報を基に重油窯の試験をおこない，前述した愛媛陶器での使用，試験場の研修生の新田の使用で重油窯の一般化を県立窯業試験場となった1963年には完成している．

また，この砥部分場は，輸出向け陶磁器の成形，デザイン習得のため商工省陶磁器試験場に陶工を送り，瀬戸からの技術伝播に努めるなど，この伝統を生かして産地の革新に努めている．無論，83名を越す総ての卒業生が今日でも，砥部焼きに従事しているわけではないが，戦前では1932年の酒井八四郎の五本松での開窯，1937年の松田喜一郎による五本松での開窯，戦後は1958年の岩田永三の五本松での開窯にみられように，砥部分場もまた産地の革新やその風土の確立には重要な存在であったことは疑いない．

窯業試験場は1953年に県立工業試験場砥部分場として後述する伊予窯業公共職業補導所を受け継いで再建された．そして1962年には県立窯業試験場として独立し，1963年に五本松に新庁舎を建設し，68年にはＬＰガス窯を導入し，伊予窯業公共職業補導所卒業の山田紀慶や同じ京都の流れをくむ京都府立専修陶工訓練校の泰山和光へと普及した．さらに，この窯業試験場は原料調査，材質試験，技術指導をおこなって産地の革新を助成している．窯業試験場はこうした産地の生産流通構造革新の基盤をなしただけでなく，技術員の中元寅義が1957年に五本松で開窯したり，大南の清月窯の二代目の新田邦治が研修したり，産地の技術革新機構としても機能している．

第二次大戦後は，1949年から県の地場産業再興施策と関連した大南の伊予陶磁器組合敷地内での上述した愛媛県立伊予窯業公共職業補導所の開設によって実業教育が再開された．酒井八四郎も初代の松島茂，1948年に今日も残る製土用水車をもつ窯を砥部川沿いに開いた二代目の佐川貞良に次ぐ三代目所長として復帰している．この補導所の卒業生は，後に県立砥部窯業試験場（1952－1960）に勤め，1956年に陶芸指導に砥部を訪れた京都美術大学の富本憲吉（1960－63）に師事し，梅山窯に入社した白石三郎のように伝統的技術革新性を受け継いで体現したものも少なくない．この他にも，卒業後30年愛媛碍子で従業後，1989年になって大南で独立した福田常義，山田白水に師事後1957年に五本松で独立した山田紀慶，卒業後渡り職人として愛知の河本礫亭，佐賀の館林源右衛門，酒井田柿エ門と修行して1976年に北川毛で開窯した米田光男などがいる．

1950年に定時制の砥部高等学校に窯業科が定員40名で設置され，専任教諭に京都高等工芸学校卒業の井門一雄が就任した．井門の赴任は，砥部に再び京都の芸風を伝播させただけでなく，柳宗悦に師事してえた民芸風をも砥部に伝えその存続に大きな契機を与える布石ともなった．井門に次いで専任教諭となった林正幸もまた京都高等工芸学校の卒業で，四代目の御手洗清は京都工芸繊維大学の窯業工芸学部の卒業であり，彼等の教育は砥部と京都の技術伝播経路を確立した．

1951年の京都の陶芸家伊藤翠壺に師事した野本星黄の八倉での開窯，同じ伊藤に師事した玉井楽山の前述した由緒ある砥部工業徒弟学校以来の施設を阿部佑工から引き継いだ1962年の双葉陶園の開窯も，この京都との技術伝播経路の強化による．

京都との関連は，1952年の野本の日展入選，伊藤の息子東慶の主宰する現代工芸への加入にみられるように日展を基礎とした砥部の工芸産地化を可能にしていった．淡交会終身会員の大南の池田富士夫の日展入選はその象徴である．そしてこれが京都市立吉ヶ丘高校の陶芸科を卒業して京都府立専修陶工訓練所を終えた泰山和光の五本松での開窯をも生み出した．同様の事は，京都市工芸指導所卒業で1970年に北川毛で開窯した大西光や京都の大丸北峯，内田邦夫のもとで修行して1971年に松前町中河原で開窯した浜岡正一にもいえる．

前述した国立京都陶磁試験場の伝習生で1965年に陶胎漆器の焼成に電気窯を用いた大南の中村太郎や戦時疎開の手塚豊房の流れも，1953年の帰京後も1982年にこの玉堂窯での修行後開窯した大南の山下勇や和歌山の森岡重好に師事した後玉堂窯に入門して1988年に大南で開窯した梅野智広に受け継がれている．宮永東山の弟子で帝展系の手塚は前述したように梅野鶴市に招かれて戦時疎開をし，戦後は県立伊予窯業公共職業補導所の講師として産地の技術革新に寄与しただけでなく，愛媛美術協会を創立して砥部焼の工芸化にも道を開いた．

京都との関連において重要なのは茶道具の制作であるが，これを萩焼の山県麗秀と宇治の朝日焼で学んで1947年に大南で開窯したのが，山田岩男（白水）である．この京都との技術伝播経路は，その後も1955年に梅山窯に入り，1961年に京都市立試験場に研修にいった大南の岩橋節夫のように中核企業による研修によっても強化されている．

三代目の砥部高等学校教諭住田優は，東京美術学校日本画科の卒業で京都と同様にデザインの中枢の東京との技術伝播経路を構築し，産地の革新に寄与した．東京との関連は大学への進学率の向上とともに強まり，玉川大学芸術科陶芸コースを卒業し1965年に川登で開窯した武本淳一郎，多摩美術大学卒業後益子の小滝悦郎などで修行して1975年に北川毛で開窯した池本忠義，同じ北川毛で1974年に開窯

した玉川大学美術科陶芸コース卒業の遠藤裕人，1978年に武蔵野美術大学を卒業後砥部町観光センターの絵師となり1989年に独立した西岡達郎などによって強化されている．

砥部高等学校の二代目校長野本義之は，実習授業重視の方針を明確にして助手として地場の陶工の前述した野本星黄，川登の優れたロクロ師の佐川厳，同じ川登で勝れた杯土を製造する佐川金広を雇用し，地場産地との連携を強めた．さらに，1953年の新校舎落成にあわせて組合と業者からなる窯業科振興会をも組織している．

砥部高等学校は1962年の全日制切替によって松山南高校砥部分校となり，窯業科（30名）も存続された．1966年には，窯業科はデザイン科となりデザイン教育の中心となった．1966年に高尾田で開窯した竹西辰人，1971年に五本松で開窯した井上公典，1988年に広田村で中田正隆に師事した後開窯した宇都宮積はこのデザイン科の卒業生である．

砥部は，上述してきたように開放的産地であり，伝統的産地間関連は強い．瀬戸との間でも，1951年に愛知県立瀬戸窯業高等訓練校を卒業して，同窓の北川毛の森陶房をへて五本松で開窯した二宮好史，同じ愛知県立瀬戸窯業高等訓練校を卒業して備前の山本陶秀のもとで修行して1971年に岩谷口で開窯した笹山準一，瀬戸窯業高等学校卒業で1988年に開窯した川登の大東直行にみられるように今日でも強い関連がある．1955年の友沢勅一による四日市，瀬戸からのノベリティーの導入もこうした関連の中でもたらされている．有田のある佐賀県とは，九州造形短期大学卒の五本松の山田公夫が佐賀県立窯業試験場のロクロ研修科を出ているように瀬戸と同様に今日でも産地間関連は保持されている．

上述してきた組合，学校，試験場に加えて砥部では，重要な産地革新の中間的組織として砥部陶友会を1960年に引き継いだ陶和会がある．砥部陶友会は，『陶和会のあゆみ』（1993年）によれば，1930年に上述した砥部工業学校の卒業生とそれを継承した県立窯業砥部試験場砥部分場の出身者で設立された．陶友会は，1932年には分場の廃止反対運動や町立窯業試験場設立運動の中心となり，産地組織を強化し，1942年には陶祖碑の建立による産地の象徴形成につとめた．第二次大戦後も，北川毛や上原の古窯の発掘による産地の歴史と伝統の復活に努力している．

前述した山田白水窯の存在は，柳宗悦の民芸運動に共鳴していた朝鮮陶器の研究家で引き揚げ後，朝鮮時代の松山の友人を介して，1948年に松山三越での個展にきた浅川伯教，巧の兄弟を砥部に惹き付けた．そして，浅川はその民芸の流れを助手を勤めた山田紀慶に伝えている．前述した1950年の井門の砥部高等学校赴任は，1953年には柳宗悦とバーナード・リーチの砥部来訪をもたらした．また，西条出身で日本大学芸術学部卒業後益子の浜田庄司の内弟子となっていた阿部佑工が1954年に西条より砥部に移り住むと浜田庄司も砥部を訪れ，砥部は民芸運動の一つの実践拠点となった．

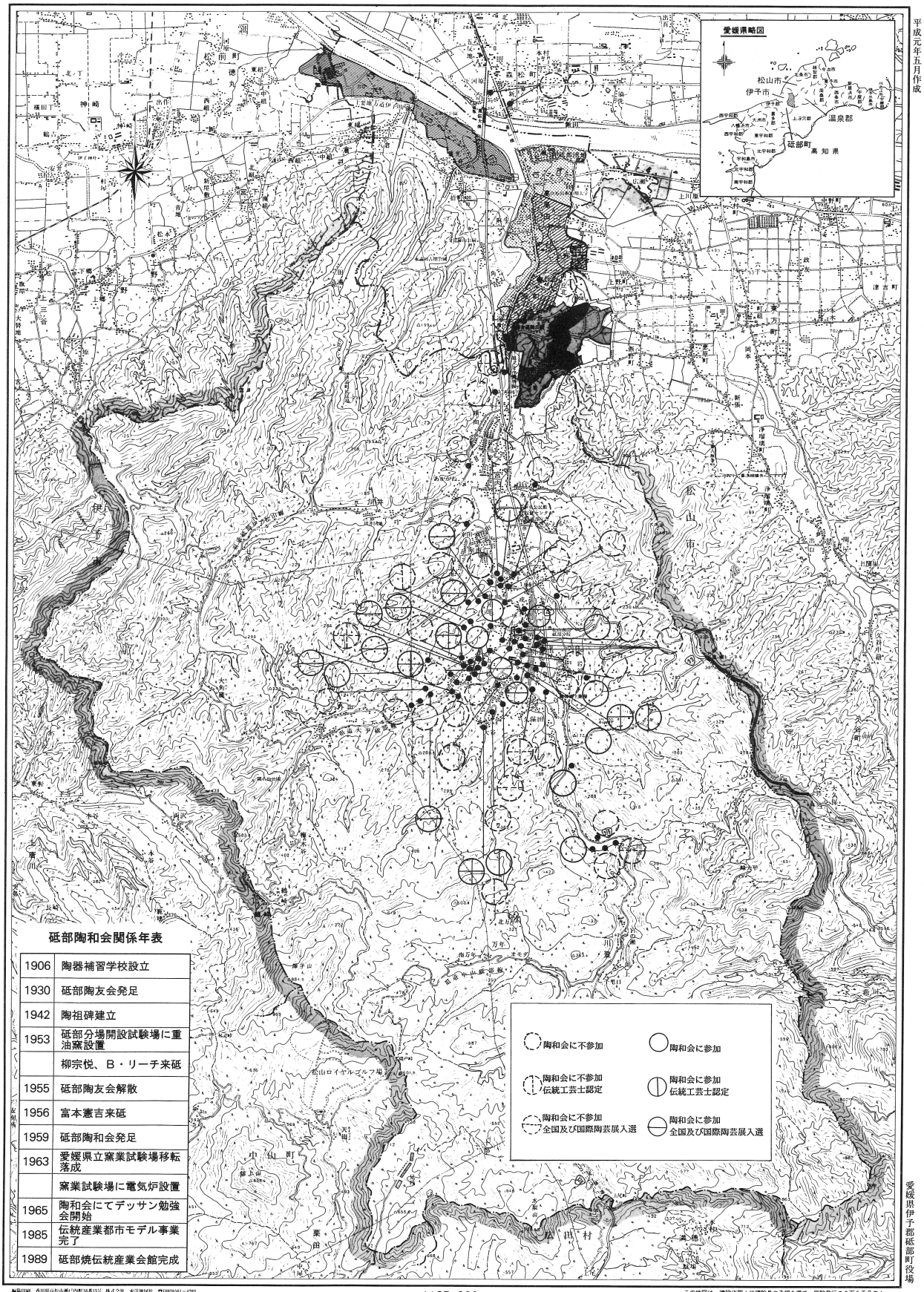
イギリス帰りの浜田と柳を結び付けたのは，漆芸家で陶芸家となり，柳の推薦で色絵磁器の九谷焼産地に近い金沢でバーナード・リーチの弟子を勤めた磐田出身の日本民芸館の鈴木繁男である．鈴木は1953年に浜田の依頼で阿部佑工の補佐にきている．1955年に鈴木は，愛媛県商工課の嘱託となり，食器への絵付けを阿部の弟子の中元竹山や梅山窯に1955年に入社したばかりの地元の岩橋節夫，1957年入社の札幌美術学院卒業者で青森，水沢を経て砥部にきた工藤省治，京都美術大学卒業の沢田などに教えた．また中核企業の梅山窯に藩制時代から保持した仲田家の天然呉須が残存し，浜田や鈴木の意向に沿え，京都美術大学出身の沢田が合成呉須を調合し得た事に加え，1955年の東京三越の砥部焼展でその民芸としての銘柄性を確立しえた事が砥部を民芸産地化するうえで大きく寄与した．

1956年に無形文化財保持者の富本憲吉が砥部を訪れ，鈴木と大南の山本宅で同居したことも民芸産地化には大きな影響を与えた．東京美術学校建築科卒業の富本は，英国に留学し，ウイリアム・モウリスの工芸運動の洗礼を受け，帰国後リーチや柳との交友で民芸運動に参画した．この富本の東京美術学校，高山の文部省工芸講習所での教え子で京都美術大学助教授の藤本能道の砥部への来訪も，他産地の状況をふまえた砥部の製品の分化に留意した産業論的視点での手作り民芸論に基ずき，砥部産地の方向を決定していった．この藤本と試験場長小野木の発案で民芸運動の推進母体として，1958年に解散した陶友会にかわって設立され59年に発起したのが砥部陶和会である（第二図）．

この陶和会で会長の長戸健市とともに中心をなした工藤を始めとした陶工を擁する梅山窯，佐川製陶所，山田窯は，民芸窯として成長してきた．これは，1957年に設立され銀座松屋を拠点とした日本クラフトマンデザイナー協会に刺激されて1959年に日本橋丸善が生み出したクラフトセンタージャパンによって促進されてきた．クラフトマンデザイナー協会の設立者の一人で砥部とも縁の深い藤本能道に対して，1962年には，クラフトセンタージャパンは砥部開発計画のため加藤達美を派遣している．そして，1964年には，第一回の陶和会展を松山の三越において催している．

この成果もあって工藤は，1965年の第一回クラフトセンター賞銀賞をえて砥部焼の銘柄性を確立している．その後も1972年の工藤のフアエンツァ国際陶芸展入選，中元の日本工芸展入選，1974年の酒井の日本陶芸展国際交流基金理事長賞授賞など陶和会は砥部焼の工芸品化の推進母体をなした．砥部町もこれに全面的に協力し，1953年には旧避病舎棟の一部を研修所として貸し，76年にはこれを全面的に

第２図　陶和会関連業種の業態別分布



砥部陶和会関係年表

1906	陶器補習学校設立
1930	砥部陶友会発足
1942	陶祖碑建立
1953	砥部分場開設試験場に重油窯設置
	柳宗悦、B・リーチ来砥
1955	砥部陶友会解散
1956	富本憲吉来砥
1959	砥部陶和会発足
1963	愛媛県立窯業試験場移転落成
	窯業試験場に電気炉設置
1965	陶和会にてデッサン勉強会開始
1985	伝統産業都市モデル事業完了
1989	砥部焼伝統産業会館完成

開放した．1989年に町役場が新築移転し，その跡に砥部焼伝統産業会館が完成すると1975年以来松山の丸三書店画廊でおこなってきた陶和会展をここに移し，砥部の買い回り産地化を促進している．

4　生産流通構造の変質と接遇環境の改善

我が国の陶磁器産地の多くは，地場の原材料に依存して発生したものである．そして，原材料の量と質が産地の規模と性格を規定している場合が少なくない．砥部陶磁器産地も，その発生の基盤をなした須恵器は北川毛や五本松の耐火度の比較的高い粘土を基に造られ，それが今日に至るまで産地の基本構造に少なからぬ影響を与えている．なかでも，北川毛高野の陶土は他に比べても優れ，砥部陶業の重要な基盤をなした．釉薬は楢灰など雑木を用いて地場で作られていたが，古鉄や長石の使用はまだ一般化しておらず，陶業産地としは必ずしも成熟していたとは言いがたい．また，瀬戸のように陶土の大規模産地として，域外に供給して陶業の中心産地から多様な窯業産地へと発展してゆくこともなく，また，瀬戸と同じ中京地域にあり，地場の陶土の乏しかった万古焼産地の桑名，四日市のように移入原料を土練し加工することも砥部ではなかった．

砥部は，上述した地場の原料と後述する地場の需要の面でも陶業産地としてはその発展に一つの限界を持っていた．この砥部が，陶磁器産地として一つの銘柄性を持ち，地方の民芸産地としてその地位を確立しえたのは地場の磁器原料としての砥石の存在である．桧垣ら（1962）の調査によれば砥部では外山，鵜の崎，障子山付近の黒雲母安山岩をもととした鵜の崎鉱床群，千里口を中心とする灰色安山岩を母体とした川登，万年鉱床群，この南の上尾峠から広がる同じ灰色安山岩の上尾，満穂鉱床群等が存在し，地場の磁器原料需要に対応していた．

北川毛の南の射場で砥部川に合流する和田川は，五本松の北を流れ外山を経て砥石山公園の南に源を持つ．この源の先には鵜の崎が峠近くに存在し，陶磁器業の展開の基軸を成している．外山村は，1700年の伊予国村高帳で70石８斗７升３合と五本松（108石５斗７升），北川毛（129石１斗１升３合），と和田川の下流に比べ米の産出量が少ないだけでなく，砥部川沿で大南（226石２斗３升４合）の奥に位置する岩谷口（81石８斗６升）やそのさらに奥の川登（126石１合）をも下まわる．

こうした外山村にとって，庄屋中村淳から代官矢野重治への文書に示された山方と石方役人の談合にみられるように前述した大阪の和泉屋との年限を定めた採掘の請負契約はその存立に重大な影響力を持った．また，上述した戸長の伊藤允譲から愛媛権令岩村高俊にあてた「砥石山之議ニ付原由御解答」によると，採掘の創業は元禄年間で大阪の商人木津屋とされている．元禄は，元年に大阪堂島の米穀取引所が建設され，米づかい経済の下で商都としての地位を確立した．そして，元禄4年，1691年には，住友友芳が別子銅山を開発しているように大阪商人による地方の資源開発が活発に進展した．寛保（1741－43）年間は農民の強訴，逃散の禁止と鉄銭の鋳造であけたように経済が混乱した時代であるが，この時期に砥部の外山の砥石山も前述した和泉屋に渡っている．1777年の砥部焼の創業から四半世紀たち，砥部焼産地も確立し，前述した亀屋による肥前からの錦絵技法の導入された文政年間には一段と栄え，砥石山も盛業で和泉屋も砥部との繋がりを強めていた．

文政元年（1818年）には外山の砥石屑に代えて砥部川沿いの川登余毛で白色の砥石鉱床を前述した向井源治が発見している．この砥石鉱床に着目した庄屋の坪内庄太郎（1832－89）は，1848年には試里正になり砥石の磁器原料としての石粉化に水車をもちいて取り組み，砥部川沿に２台の大水車を持って高質の磁器用石粉を大量に供給し，産地拡充の基盤を確立した．

砥部の水車は磁器用石粉だけではなく，絵薬用の小規模水車が用いられ，上述した和田川とこの砥部川沿は，砥部陶磁器にとって重要な原料供給地となり，陶磁器産業の集積の基盤をなした．臼数で20－16個の大水車は，五本松では下向井窯が芳しの瀬と地蔵に，宮内では幸田で藤田窯が，川井は中村窯，七折は坂本窯（２台），千足は下向井窯，岩谷口は下向井窯（井岡窯）と限られ，大南で上梅野窯と工藤窯が存在する．大水車が多数立地するのは，砥部川とその支流の沢沿の川登であるが，ここでも大水車は玉井和太郎（５），佐川広太郎（４），久保（１），三木（１）と二人の前述した有力者に限られていた．無論，砥部川上流の万年は水力も強く，灌漑用の利用もなく，陶磁器用石粉の生産に適していたが，上流にあって大水車の保有は無く，中小水車にとどまった．しかし，万年地区以外では田植期は休止を余儀なくされていたのに比べるとここでは周年操業も可能で石本政吉，又市，篠原光治の共同水車もあり，中小二台を持っていたのは佐川亀太郎のみで小規模専業業者が稼動していた．

こうした地域的差異をもった原料供給や杯土生産の技術の革新においても，上述した中核企業や組合の果たした役割は少なくない．なかでも前述したように，1871年に向井和平は，丹波出石の出身の平尾儀七の助けで，上杯土を造る粘泥乾燥窯を開発している．向井は，1914年には川沿の埋立地に建てた二階建工場の一階にフィルタープレス，湿式スタンプミル，砕石用大型臼を設置し，量産体制を整え，1919年には瀬戸よりトロミルを導入した．この導入は，反面砥部が瀬戸に比べ産地規模，構造の多様性の欠如，周辺

での機械工業発展基盤の弱さから，1953年の単独密閉可変式ロクロの開発はあったものの，砥部は陶磁器産地としては窯業機械，工具の発展では遅れていた事をしめしている．

原料供給面でも中核企業は重要な役割を果たしてきたが，前述したように1929年から県立工業試験場砥部分場が，1938年からは伊予陶磁器工業組合が陶石から杯土まで一貫生産を行うようになると大南の組合の製土工場が原料供給の中核となった．

今日，かつての中心地川登に残存する製土業は1954年創業の佐川金広で川登，万年と砥部町内だけでなく，広田村との境の上尾峠付近からも採掘し，1981年には大倉和親記念財団から杯土製造で特別表彰を受けたように比較的高品質の杯土を生産してその8割を砥部の窯元に供給している．1967年からは南山窯を併設して自ら杯土の品質を陶工として検品し，生業としての一貫性を確立した．しかし，1984年には双海町の高野川陶石が休山し，広田村の伊予鉱業所が廃石の再選鉱を必要とし，名古屋資本の共立窯業も年間6000トンの9割以上を瀬戸，美濃等価格の高く昔からの取引のある中京地域に出荷しており，産地としては，1990年の愛媛県砥部焼産地実態調査によれば，この原料陶石の確保（44.0%）が最大の課題で，組合にその確保（79.2%）を望むものが圧倒的に多い．

原料の独自性に加え，砥部陶磁器は前述した「砥部焼の歴史」において詳述されているようにその販売面でも独自の地域性を有していた．鎖国の断行された1635年に，御替地代官が郡中におかれると，城下町から離れた砥部はその管轄下に置かれ，砥部焼は，砥部砥石とともに物産会所に集約された．1777年の門田による民窯での磁器生産開始後もその支配下におかれた砥部焼は，両城下町と郡中の特権商人によって松山や大阪に販売された．地場産地に集荷場が生まれ，産地問屋が育つのは，1857年に郡中の大洲藩の瀬戸物役所に対して，支藩の親谷藩が唐津物役所を設けて，前年に願いのだされた岩谷口村の庄屋の日野と下麻生村の庄屋の西岡に問屋の許可をあたえてからである．郡中では郡中の門田屋と麻生の門田が問屋として成長した．

砥部の窯元は，地場産地問屋が生まれてからも，前述した上原窯の仲田家文書に両役所の口座が記されているように相変わらず両役所と取引を行っていた．そして，地場の大南の福島油屋，宮内村の橋田など卸小売の行商人による松山や大阪での販売も幕末には盛んになった．これが幕藩体制の崩壊とともに，松山藩領でわいた船での瀬戸内海の商業中心であった松前との連携を強化することとなった．1877年には松前商人の浜松藤八が大南の大西窯を譲り受けて経営するまでに関係を深めている．

こうした流通販売体制は今日に至るまで国内市場の基本をなすが，これに今日ではその重要性の薄れた輸出市場が加わったのは，1885年に向井と城戸が長崎商人の小村徳平を通じて清国に輸出して以来である．1890年に向井が淡黄磁器を生み出し，1893年にシカゴの世界博覧会で入賞すると東南アジア，豪州，南アジア，東アフリカから米国へと輸出市場は広がっていった．

1895年には，砥部焼窯元22軒中20軒が従業員10人以上の中小零細企業であり，愛媛県内の170軒の一割以上を占めて愛媛の中核産業をなしいた．人件費も25%以下と安く，値段が手頃で比較的丈夫な伊予ボールを中心とした砥部焼の輸出は増大し，前述した橋田商事が隆盛をきわめた．郡中の伊予陶器，郡中に梅野等窯元が中心になって設立した伊予陶磁器購買販売組合がこれと競合した1918年頃には輸出が全販売額の７割を占めていたといわれる．

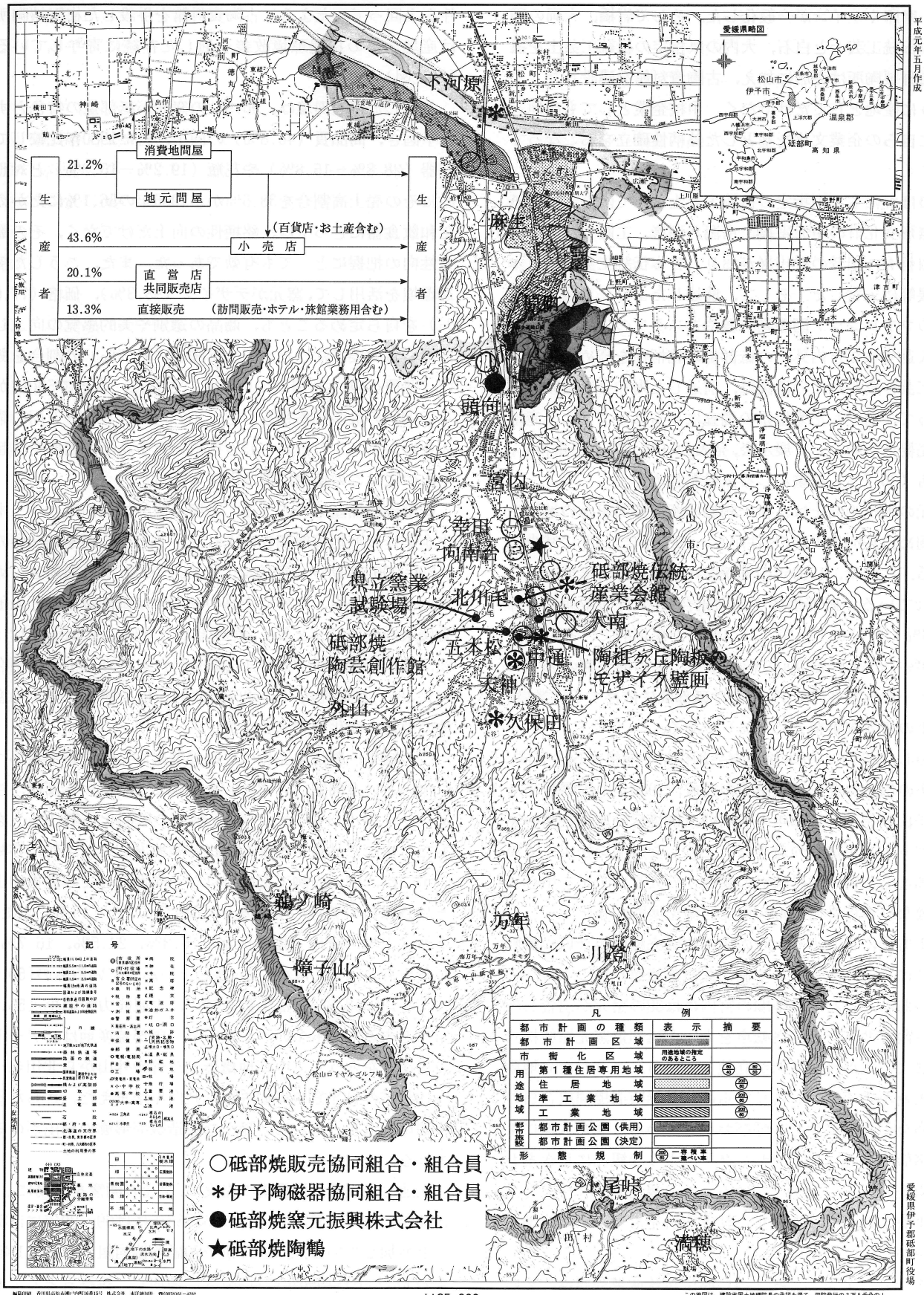
その後は景気の変動に翻弄され，窯元も1919年の17窯から1930年には9，1941年には４窯にまで減少した．しかしながらも，戦時体制下をのぞき砥部焼の輸出は継続された．戦後は1945年には11窯に戻り，1951年頃までは輸出を基盤とした産地形態を保持しつづけた．1951年当時の輸出商社は，神戸の大信貿易に名古屋の南洋商行が加わり，しだいに名古屋の国際的生産流通機構の下に組み込まれていった．砥部焼の輸出仕向け地は，愛媛陶器，梅野製陶所，工藤製陶所ともビルマ（ミャンマー）を主とし，砥部焼は，重量税がなく，白素地で関税の安い瀬戸物との国際競争力を既に失っていた．

しかし，この時期に早くも輸出から内需への産地の転換を余儀なくされたことは砥部陶磁器産地の存続には有効に機能したとも言えよう．すなわち，前述したように向井和平による淡黄磁器の開発，戦時疎開による梅野と手塚の関係，戦後の草月流の勅使原蒼風から梅野栄次郎への新作花器の発注に代表される新流派との関連等が花器製造を通して産地は砥部焼の工芸化を可能とする素地をつくった．そして，1953年の柳，バーナード，浜田が砥部を訪れ，その花器から食器を主とした民芸産地化を促進することを潜在的に支えた．なかでも，中核企業の梅野製陶所と陶和会の果たした役割は前述したように大きい．

梅野は，1959年に町長を勤めていた時，砥部町公民館内に物産館を併設した．この結果，1960年には窯元も15になり，1962年には東京での見本市をひらき，札幌で見本市を催した65年には窯元は18に増加した．そして，1966年には，物産館の経営が砥部焼卸商組合から砥部商工会に委ねられ，天皇，皇后陛下の視察でその銘柄性を確立させている．

こうした銘柄性は，陶友会の結成と会員の陶芸展での入選，クラフト運動によって高まった．そして，次第に，国内観光の増大と道後温泉，松山城等を接遇環境とした砥部陶磁器産地の買い回り産地化を可能としていった．この結果，1970年には50窯元，75年には66窯元にまでの増大をも

第３図　生産流通経路の構造と販売店の類型別展開形態



たらしている．1976年に国の伝統的工芸品産地に指定されると，窯印やサインが一般化した。そして岩橋，大岡の国指定の伝統工芸士と白石，大内の県指定の伝統工芸士を擁した梅野製陶所は売店に加え，古陶資料館を建設した．このように産地としてだけでなく，中核企業としても産地とともに自らの企業文化を基とした銘柄性確立をおこなっている．

このほかにも，国指定の伝統工芸士としては五本松の砥部町無形文化財の中元寅義，白潟八洲彦，工藤省治，大南の松田哲夫，川登の佐川巌がおり，日本伝統工芸展，日本陶芸展等に入賞した．そして，前述したように工藤がイタリアのフアエンツァ国際陶芸展やモスクワの日本デザイン展に入選するなど内外での砥部焼の銘柄性を高めた．こうした工芸作家や陶工の活躍は，前述した陶和会の活動とあいまって，前述した愛媛県の調査に見られるように，産地に販売促進活動として展示会，発表会（46.7%）を重視し，直営店（36.7%）を重んじる気風を強めた．

窯元の地位の向上は，伊予陶磁器販売協同組合の地位を逆に弱め，1969年当時の8件から，1989年には4件に減少している．これは，1990年の愛媛県による砥部焼実態調査にも現れている．砥部焼販売協同組合員の7件の業態は，卸（28.6%）に対して小売（71.4%）と圧倒的で，その大半（80.0%）が資本金2000万円以下で，その売上額の96.4%を主に一般消費者(66.9%）向け砥部焼に依存する従業員6人以下の極零細企業（85.4%）である．

しかし，1983年の五本松の陶芸創作館と陶祖が丘の完成，1985年の伝統産業モデル事業の完成，1986年の国際観光モデル松山圏指定，1989年の大南の砥部焼伝統産業会館の完成，アートの里造りの着手は，こうした反面で松山，道後と高知を結ぶ国道33号線沿の産地への入り口千足を中心に大規模な駐車場を備えた卸小売店舗を展開させた．

松山方面には，古くからの砥部焼販売協同組合員の梅野定四郎によるレストランを備えた砥部焼館うめの１号，２号館がある．これと産地間の宮内には38の窯元が出資し喫茶店や陶芸教室，貸し自転車をもった砥部焼窯元振興株式会社による砥部焼陶芸館が立地している．こうした立地動向が大南から千足への古くからの砥部焼販売協同組合員の宮内商会の立地移動をも呼びおこしている．また久保による製造販売の砥部焼観光センターのような観光に重きをおいた販売所をも生み出している．この観光センターも今回実態調査した44件の半数がこれと取引をもつように産地と深くかかわっている．

この一方，上述した陶芸創作館や伝統産業会館は，その間に位置する砥部焼販売協同組合員の城戸陶器店や伊予陶磁器協同組合員のウメノ青興陶園の接遇環境を改善しそれらの存続を助けている．また，最も奥に位置する梅野精陶所と取引を持つものも今回の調査では13件と宮内商店の10件を上回っていたように古陶資料館を併設した梅野精陶所は産地全体の接遇環境改善を通した存続に寄与している（第三図）．

こうした接遇環境は，96.8%の窯元が砥部焼の特色とする手画き，高品質（46.8%）の向上，特に1980年比較して花器（28.8%－15.8%）や花瓶（19.2%－15.2%）と対照的にその売上高割合を38.5%から1990年の56.1%にたかめた和飲食器にとっては，銘柄性の向上だけでなく，その需要性向の把握にとっても有効であった．また，こうした接遇環境を活用して，窯元がデザイン（98.3%），価格（77.0%）を自ら定めることも，商品の選別や美的感覚の向上した消費者の要求にこたえて，手画き（91.7%）の割合をあげ，品質の向上を図っていった．さらに，食器で500円から5000円の最多価格帯をもち，１万円から５～６万円の購入をはかり，１万円から45万円にいたる花器の需要を喚起するのにはこの接遇環境は大切であった．

砥部陶磁器産地での上述した製造販売体制の確立は，中小企業庁の産地実態調査によれば，その出荷額を1960年の1,790,000万円から1989年には1,820,000万円に増加せしめている．しかも，その売上高の65.5%は砥部町内でその他愛媛県内が15.1%と多く，直営店で10.5%，直接販売で12.5%，協同販売で9.2%と自己販売割合を高め，小売店割合（41.3%）が卸売店（21.2%）の約二倍に達し，完全に産地の製造小売化を完成させた．

この結果，製造小売化は，砥部焼に注文に生産が追いつかないという問題（51.8%）をひきおこしている反面，注文ロットの小口化（33.9%），納期の短期化（33.9%）をもたらすなど品質を保持した民芸産地としての革新，存続の上では，個々の陶工だけではなく産地としての技術向上と品質保持の普段の努力を不可避にしてきている．また，土地，工場，倉庫で拡張予定（16.3%，24.5%，16.7%）があるものは多くはないが，狭いとかんじているもの(50.0%，54.1%，58.8%）は半数を越え，生産能力を過小（55.0%）とするものも多い．したがって砥部焼産地は，アートの里造りをとうしての産地構造の改善や外山から北川毛への1982年の緑光窯の移転等移転動向を踏まえた，さらなる接遇環境改善とあわせた適正な製造販売形態の創出がのぞまれる．

上述した販売流通機構の充実は，窯元の開窯を容易にし，1980年には65窯元であったのが，85年には69，90年には82窯と増加している．そして，伊予陶磁器協同組合員数も1985年の453人から1990年には481人に増加し，後継者として家族だけでなく弟子を持つものも少なくない．

弟子の出身地も，梅野，阿部佑工のもとで修行した江泉窯の京都や，1986年に宮内で開窯したばかりの白潟の弟子

の永立寺窯の東京出身者のように今日でも多地域にわたる．しかも有田の久保英雄の弟子で1971年に五本松で開窯したひとし窯の弟子の古野秀司のように松山から砥部を経て瀬戸に向かったように現在でも渡り職人の性格を持つものも少なくない．後継者割合は今回の実態調査でも48.2%と高く，産地革新にとって重要な存続機構が既に形成されていることを示している．松前出身で1985年に川登で大南の神郷窯の塩見正春(国際陶芸展入賞者，梅野精陶所出身)から独立した佐賀道彦，同じ塩見の弟子で大洲出身で，五本松において1989年に開窯した池田のように伝統的地域間関連もこの参入機構にいきている．しかも経営者前職は前者のような農業もあり，後者のような会社員もあり，多様である．

1990年の愛媛県の砥部焼産地実態調査によれば，経営者の年齢は45才から55才層が30.5%と最も多く，これに35才から45才層（28.8%）が続き，35才未満も11.9%いる．これらの創業も98%が第二次大戦以降で，しかも昭和50年代が40.3%，40年代が30.6%と多く，1985年以降ですら8.2%を数える．

無論，企業形態は，従業員3人未満の零細生業層が51.7%を占め，10人未満の零細企業層が31.6%で，従業員30人以上で売上高1500万円以上は，中核企業の梅野精陶所のみである．この梅野精陶所でも約30人の絵付士の３分の２が女性であるように砥部陶磁器産地での女性の参入はさかんである．絵付だけでなく，北川毛の西山千代子，前述した玉井楽山の弟子で松山の玉井真生子等の女性の陶芸作家をもこの産地は生み出している．

5 むすび

砥部陶磁器産地は，陶業を母体とし地場の原料を生かした大洲藩の殖産政策と関連して産まれた．この殖産政策は，朝鮮からの直接的陶工の移転とは結び付いていないが，間接的には肥前の陶磁器産地との関連や戦後の浅川を通じた関連で朝鮮との技術的関連は浅くはない．中国も1885年の胡鉄梅の移住を通じて特に絵付に影響をえている．砥部は国内にあっては，陶磁器の二大産地である有田と瀬戸の間にあり，渡り職人を介して両産地の技術や経営感覚を身に付け，地方産地として存続してきた．

地方にありながら，砥部が技術的にも美観のうえでも先進産地と競合しえたのは，門田，向井，梅野といつた中核企業が江戸，明治，大正と現れ，特に梅野がそれぞれ性格を異にする民芸作家の柳，バーナード，浜田，富本，藤本を戦後に砥部に逗留させ，砥部の民芸産地化を促したことによる．民芸産地化には，産地内では向井に代表される高度な技術の蓄積が，産地外からは戦時疎開の手塚のような梅野による先行的工芸技術導入があったことを忘れてはならない．これにもまして，柳，バーナード，浜田を結び付けた陶工鈴木の存在も重要である．

砥部がこうした技術を消化し，革新機構を自ら形作る上では，学校，組合，試験場といった砥部陶磁器産地それ自体が生み出してきた所謂中間的組織がはたした役割は大きい．なかでも，村立砥部工業徒弟学校に端を発する学校での京都や東京からの教師が技術と感性の伝播にはたした役割にははかりしれないものがある．また，実習を通して砥部に伝播したこうした技術と感性を地域化した佐川の考えには，今日でも見過ごしえない技術・産業の重要な地域化政策としての重みがある．組合の活動としては，杯土工場の建設による産地での量産化の基盤形成に果たした役割を忘れるわけにはいかない．これは，また今日では，生業層や極零細企業による作陶を可能とし，砥部の民芸産地化を支えている．試験場は，砥部においては学校や組合の媒体としての役割も歴史的に果たし，技術革新だけでなく産地内での陶工の自己増殖のうえでも重要な機能を発揮した．

砥部陶磁器産地の技術的，感性的革新のうえでは，戦前の陶友会，戦後の陶和会といった陶工の自主的研究組織の存在も重要である．これらは単に先進的技術，感性の導入，革新の母体となっただけでなく，自ら展覧会を通して日本や海外での銘柄性の向上に努めている．民芸産地としての開放的存続機構としての陶和会の役割なくして，今日の砥部陶磁器産地の民芸産地化は不可能であったといっても過言でない．

砥部陶磁器産地では，梅野精陶所のように今日まで続く中核企業は存在するものの，それ自体は民芸運動を推進してきた製造卸業である．また戦前の橋本商事のような地場の産地輸出問屋が倒産し，産地問屋が比較的小規模でしだいに卸小売業化したことも陶工による製造小売化を可能とした．これは，窯元による砥部焼窯元振興株式会社の設立にみられるような松山と高知間の観光地化にあわせて手画き陶芸教室などを併設した国道沿の土産物店の開設により，銘柄性を活用した産地の買回り産地化を可能とした接遇環境の改善とも深く関っている．

無論，1976年の伝統的工芸産地指定に始まり，83年の陶芸創作館や陶坂の道づくり，85年の伝統産業都市モデル事業の完成，86年の国際観光モデル地区指定，そして，89年の砥部焼伝統産業会館の完成とつづく，産地としての接遇環境の改善も砥部の民芸陶磁器産地としての確立には大きな役割を果たしたことは言うまでもない．

本論は，1995年にオックスフォード大学での日本の工業革新の講義の一部に加筆したものである．調査にあたって

は愛知教育大学大学院の鶴田氏に，作図には九州大学大学院の田中嬢，山下助手にお世話になった．実態調査に御協力をいただいた県，町，組合，企業の方々とあわせ記して謝意を表したい．調査には1995年度科学研究費，一般研究C，課題番号06680141「風土文化の革新と地場産業の国際化」の一部を用いた．

参考文献

愛媛県（1990）砥部焼陶磁器製造業産地実態調査　84p.
砥部町教育委員会（1969）砥部焼の歴史　330p.
砥部町誌編纂委員会（1988）砥部町誌　1231p.
砥部焼の里整備計画策定委員会（1991）砥部焼の里整備計画報告書　110p.
陶和会（1993）陶和会の歩み　109p.
宮川泰夫（1977）：工業配置論　大明堂　pp.996－1027
Y.MIYAKAWA（1981）：Evolution of Industrial System and Industrial Community Sci. Rep. pp.49－84
Y.MIYAKAWA(1985)：Rural Industrialization in Japan in "Rural Industrialization in Third World Countries" edited by R.P.Misra, Sterling Publisher. pp.193－206
宮川泰夫（1989）：国際工業配置論（下）大明堂　pp.101－115
宮川泰夫（1993）京都の伝統工芸の中枢性，愛知教育大学　研究報告，42，pp.23－37
宮川泰夫（1994）：村上木彫椎朱産地の存続機構，愛知教育大学研究報告，43，pp.39－55
宮川泰夫（1995）風土文化の革新と三州瓦産地の変容 比較社会文化，1，pp.29－48
山本典男（1993）戦後の工芸運動の展開と砥部焼 砥部磁器史下 pp.1－28